

仙台市市民文化事業団の助成による 「政宗が育んだ「伊達」な文化を知る —仙台藩茶道石州流清水派の確立と その特色」の解説



仙台藩茶道石州流清水派宗家十一世
仙台藩志会理事・「政宗公ワールド」理事
東北福祉大学特任教授・東北大学名誉教授

大 泉 道 鑑（康）

本論に入る前に、今回の仙台市市民文化事業団による支援事業の趣旨を、簡潔に述べておきたい。皆様ご承知の様に昨年は、新型コロナウイルス感染症の全国への拡大に伴って、文化活動を活発に行なってきた文化人・文化団体は勿論のこと、多くの国民が社会活動を停止せざるをえなくなり、甚大な被害を被つた年になつた。そのさなか、仙台市市民文化事業団は、文化活動の助成・支援の一環として、更にメディアを通した文化活動が、その感染拡大防止にも役立つとの考えのもとに、「多様なメディアを活用した文化芸術創造支援事業」を広く市民団体に公募を行なつた。その結果、

多数の応募団体から、仙台藩祖伊達政宗公（永禄十年～寛永十三年一一五六七～一六三六）が育んだ「伊達な文化を知る」という内容の事業も選ばれた（申請者中野由美代表）。この事業の正式な名称は「伊達男子プロジェクト」（〇一〇）で、仙台で活躍中の「仙台和楽器男子」が、政宗公が愛して止まなかつた茶道や能を初め、仙台味噌等の食文化から神社仏閣の建築文化遺産等まで広く伊達文化を楽しく、しかもまじめに学び体験する様子を、ユーチューブ専用チャンネル等のメディアを活用して、国内外に発信しようと計画・実施された。このプロジェクトの共催・協力団体として、藩政時代から現在まで伊達文化の中核に存在し続けてきた仙台藩茶道石州流清水派（当流）にも協力が要請されたので、先に述べた事業の趣旨を理解してこの取材に協力した次第である。この様な訳で今回、「仙台藩茶道の確立とその特色」について、当流が取材された動画（巻末の「注記」参照）の内容を、三つに大別して説明する。

まず、第一部として筆者が「伊達文化を代表する当流の歴史学的特徴」について、主として伊達家の正史として名高い龜大な『伊達治家記録』等の文献を辿りながら、解説を行なつた。（図1）。



図1 「仙台藩茶道石州流清水派」について解説している筆者

伊達男政宗公は、全国屈指の勇猛果敢な戦国大名として、現在でも国民的人気を博している。また、仙台藩の政治と経済の礎^{いしづえ}を築いただけではなく、伊達文化の基盤を確固たるものにした、正に文武両道を兼ね備えた我が郷土の英雄・政宗公である。今回の話題の主題である芸術性に優れた伊達文化の芸術や芸能のなかで、政宗公は特に茶道及び能を心から愛して、しかもいすれにも造詣^{ぞうけい}が深かつたと言われている。茶道については、茶聖千利休（大永二年～天正十九年～一五三三～一五九二）没後大名茶人として第一人者となつた古田織部（織部流の祖。天文十三年～元和元年～一五四四～一六一五）の高弟の名をほしいままにしていた清水道閑（天正七年～慶安元年～一五七九～一六四八）が、政宗公によつて初代の茶道頭に招聘^{しょうへい}されたことにより、仙台藩茶道が確立していく（図2）。

二代藩主伊達忠宗公（慶長四年～万治元年～一五九九～一六五八）の時代になると、徳川幕府の茶道方では、大和郡山城の城主で石州流の開祖片桐石見守貞昌（石州慶長十年～延宝元年～一六〇五～一六七三）の力が増大の一途を辿つていつた。その情勢をいち速く敏感に察したかの様に、忠宗公は一世清水動閑（慶長十九年～元禄四年～

一六一四（一六九二）を大和郡山の石州のもとへ派遣して、実際に十三年間の永きにわたり弟子入りさせたのであった。その後、忠宗公は、二世動閑を帰藩させて茶道頭に任命している（図3）。

二世動閑が四代将軍徳川家綱（寛永十八年～延宝八年～一六四一～一六八〇）の茶道師範石州の高弟として最も注目される点は、石州が徳川家の茶道の規格を定めたとされる『石州流三百箇條』に註解を新たに加えた『清水動閑註解石州流三百箇條』及びそれと関連性の深い文献『動閑茶湯書』を著わしたことである（図4）『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』。更に、二世動閑は一世道閑の古事・来歴について書き記した『渡紙庵之記』（掛軸）も残している。これらの文献は、後に四世清水道簡（享保元年～天明三年～一七一六～一七八三）が入手した天下一品の『片桐石見守貞昌宗閨居土像』（掛軸、老中松平周防守康福自画贊）と共に、茶道頭・宗家を継承した印（三種の神器）を意味するものである（図5）。従つて、当流ではこれらの歴史的に重要な文献が、この上もなく大切なものとして扱われ、歴代の宗匠を経て現在筆者に受け継がれている。

四代藩主伊達綱村公（万治二年～享保四年～一六五九～一七一九）は、天下に名を馳せた数奇大名として、その名が歴史に深く刻まれている。特に、茶道に造詣が深かつた綱村公が、二世動閑没後間もない元禄五年（一六九二）にその繼承者に藩主自ら指名したのは、実子の清水快閑ではなく、その門人のなかで既に第一人者と評価されていた馬場道斎、後の茶道頭三世清水道竿（寛文二年～元文二年～一六六二年～一七三七）であった（図6）。この様な経過を辿つて綱村公から茶道頭に任せられた三世道竿は、その後君命により石州没後平戸藩主松浦鎮信（石州流鎮信派の祖。元和八年～元禄十六年～一六二二～一七〇三）に、更に石州没後石州流の第一人者となつた片桐家々老藤林宗源（石州流宗源派の祖。慶長十三年～元禄八年～一六〇八年～一六九五）に師事した。幸運なことに、この優れた両師匠に入門出来たことにより、三世道竿は手前により一層磨きをかけただけでなく、深遠な意味を有する茶湯の神髓を悟り、後に石州流清水派の開祖として一派を開く道に繋げていったと言われている（十世大泉道鑑著『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』）。

さて、前に述べた様な古き歴史と輝かしい伝統を誇る当

仙台藩茶道とは

仙台藩祖伊達政宗公像
(仙台市博物館蔵)



●仙台藩茶道の基盤を固めた。

一世 清水 道閑
(天正七年～慶安元年—1579～1648)

- 京都の高名な茶人で、織部流の祖古田織部（山城西岡3万5千石）の高弟。
- 名は宗怡、号は澁紙庵。
- 伊達政宗公により仙台藩茶道の初代の茶道頭に招聘された。

図2 仙台藩茶道の基盤固め

二代藩主伊達忠宗公
(仙台市博物館蔵)



●石州流へ変える基盤固めに貢献した。

二世 清水動閑
(慶長十九年～元禄四年—1614～1691)

- 一世道閑の姉婿飯田小左衛門の嫡子。名は紹之、伝習庵と号す。忠宗公の命により名を道閑、道漢、動閑と改めた。
- 君命により、片桐石州のもとで13年間修業し、帰藩後、茶道頭を命ぜられた。
- 『清水動閑註解石州流三百箇條』、(『動閑茶湯書』を含む)及び『澁紙庵之記』(「三種の神器」)を著わし、仙台藩茶道を石州流へ変える基盤を固めた。

図3 仙台藩茶道を石州流へ変える基盤固め

流の特徴を、歴史学的な観点から述べる。流祖三世道竿は、創意工夫を凝らして石州流の流儀の芸術性とその完成度を高めて、石州流清水派を新たに開いた。その手前は、茶道頭・宗家を継承した歴代の宗匠たちにより磨きぬかれたが、そ



図4 『清水動閑註解石州流三百箇條』及び『動閑茶湯書』



図5 二世動閑筆『渋紙庵之記』(右) 及び
老中松平周防守康福自画贊『片桐石見守貞昌宗閑居士像』(左)

の流儀が藩政時代のまま些^{いさき}かも変えられることはなく正しく伝承され、現在に至っている点が、当流の第一の特徴である。第二の特徴として当流には、「極真の手数（手前）」がある点があげられる。この手数は勿論門外不出であり、こ



図6 石州流 清水派 の確立

代表的な当流の手前の特色を、具体的に箇条書きにまとめて次に記した。

可能であつたと感服した次第である。

れを目にすることが出来る者は、茶道頭・宗家とその後継者及び仙台藩主に限られ、例外は天皇家（勅使）のみである。第三には、前に述べた当流の茶道頭・宗家の繼承の印（三種の神器）が、筆者まで代々伝えられてきたことが注目されよう。以上の歴史的事実は、歴代の茶道頭・宗家がこの「極真の手数」と「三種の神器」によって、どんな激動の時代でも堅く守ってきたことを如実に物語つてゐる（図7）。従つて、筆者は当流が、この二つの良く工夫された仕組みによつて未来永劫存続し、発展していくと信じて疑わない。

三世道竿が「薄茶が眞の茶である。」と茶書『道竿拾躰』に記しているので、第二部「実践」ではその薄茶の手前が披露されたが、「仙台和楽器男子」メンバーにそれを見学してもらひながら、筆者によるその具体的な特色的説明を通して、学んで頂いた。なお、ここで当流師範金城道里が担当した手前は、伊達文化を代表すると言われている当流に相応しく極めて優美に、しかも流れる様に披露された（図8）。このことは、日頃稽古に励み心と技が磨かれたため、

石州流清水派の歴史学的特徴

1. 藩主のための手数(手前)。
 - (1)極真の手数: 門外不出で当流の茶道頭・宗家とその後継者、仙台藩主のみが見ることが許され、例外として天皇家(勅使)。
 - (2)二連天目台子の手数: 藩主の奥方同伴
2. 石州公の直弟子二世清水動閑著『清水動閑註解石州流三百箇條』及び『動閑茶の湯書』を土台にして継承発展した。当流の「原典」としての役割を果たし、これにより江戸時代の流儀のまま継承されてきた。また、二世動閑は『渋紙庵之記』(掛軸)も書き残した。
3. 四世清水道簡は、天下一品の『片桐石見守貞昌宗関居士像』(掛軸)(老中松平周防守康福自画贊)を入手した。この文献は、上記2の箇条で示されている文献と共に、茶道頭・宗家を継承した印(三種の神器)として十一世道鑑まで伝えられてきた。
以上のことから、当流の歴代の茶道頭・宗家は、「極真の手数」及び「三種の神器」により守られてきたと言える。

図7 仙台藩茶道石州流清水派の歴史学的特徴



図8 手前を開始する当流師範金城道里

1 お辞儀 膝の横に拳を付ける(手のひらを付けない) (図9)。「手をつき喉に、手のひらを上に致し大指斗ゆびのはらを畳へ付候。」(十世大泉道鑑著『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』、百十二頁、昭和五十五年)。

2 居すまい 亭主は、居すまいを道具に対し少し左へ斜めに坐る(手前が正客から最も優美に見える角度) (図10)。手前の動作が曲線を描く(曲線美) (図11)。



図12 体験指導を行なっている宗家代理・教授
大泉道紀



図9 「お辞儀」：膝の横に拳を付ける金城道里。



図13 薄茶の飲み方：茶碗の正面から飲む。



図10 「居すまい」：道具に対し体を少し左斜めに構える金城道里。



図14 茶を飲んだ後の挨拶：「大変結構でござります。」



図11 「曲線美」：曲線を描く作法が多く見られる金城道里。



図15 亭主へ茶碗の返し方：正面を亭主側へ回（上）して返す（下）。

- 4 茶の飲み方 茶碗の正面から飲む（その正面を避けない。）。
- 5 薄茶を重視する。「手前ハ薄茶ガ専也。是ヲ真ノ茶ト云。」（三世清水道竿著『道竿拾躰』本文三頁）。
- 6 濃茶は、茶筅をよく振る。「茶筅で大きな泡を消し、少し黄味がかった緑色の細やかな泡がほんの少し盛り上がる様になる。」（十世大泉道鑑、『関』、七号、五頁、平成九年）。
- 7 主菓子に小さい味噌漬二切れを添えることがある（十世大泉道鑑、『関』、七号、六頁、平成九年）。
- 第三部「体験」として、「仙台和樂器男子」のメンバーが、当流の特徴を学んだ後に、まじめに、しかも楽しく当流の手前を実際に習って頂いた。この体験の指導は、当流宗家代理教授大泉道紀が担当し、その様子を次の図12～15に示した。これまで、筆者は政宗公縁の伊達な文化として当流が今回取材された内容の概略について、主としてその動画を用いて写真化した図を使用しながら解説してきた。今回の様なメディアを活用した文化活動の方策は、新型コロナワイルス渦のもとでは当然のことながら、この様な深刻な国難から解き放たれた時が来ても、日本固有の文化芸術のすば

らしさを、正しく国民に理解して頂くための新しい有用な手段として、定着すると期待される。従つて、今回の当流の取材が、優れた「伊達文化」の一端を、多くの国民の皆様の理解を深めて更に、それを世界へも発信していくことに少しでも寄与するならば、伊達文化の一翼を担つてきた当流を預かる者として筆者の望外の喜びである。

【謝 辞】

今回の当流の取材は、仙台市市民文化事業団の文化芸術創造支援事業の助成のもと実施されたもので、同事業団関係各位に心から感謝の意を表します。また、この事業の申請者・企画者の中野由美氏に併せて厚くお礼申し上げます。

【参考文献】（五十音順）

- 『片桐石見守宗閑居士像』老中松平康福（妙閑子）自画贊
十一世大泉 道鑑蔵
- 『関』（七号）大泉道鑑 平成九年
- 『原色茶道大辞典』井口海仙、末宗広、永島福太郎監修
淡交社 昭和五十年
- 『茶道辞典』桑田忠親編 東京堂出版 昭和四十三年

『渋紙庵之記』二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵
『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』十世大泉 道鑑丸 善出版サービスセンター 昭和五十五年
『伊達家治家記録』仙台市博物館蔵

『伊達綱村茶会記』酒井巌 中央公論事業出版

昭和四十三年

『茶の湯文化学』（二十八号）「動閑拾躰」十世大泉道鑑
十一世大泉道鑑 平成二十九年

『道竿拾躰』三世清水道竿 東北大学中央図書館蔵

『動閑茶湯書』（十八冊）二世清水動閑 十一世大泉道鑑蔵
『如幻三昧集雜著』「茶人説」、「茶説」伊達綱村仙台市博物館蔵

館蔵

『よくわかる茶道の歴史』谷端昭夫 淡交社 平成十九年

【注 記】

今回の動画は、ユーチューブで「伊達男子プロジェクト（伊達家茶道石州流」と入れて検索すると、見ることが出来ます。